慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	政治学科七十年の歩み
Sub Title	
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige) 池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.5 (1968. 5) ,p.283- 289
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	法学部政治学科開設七十周年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680515-0283

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

政治学科七十年の歩み

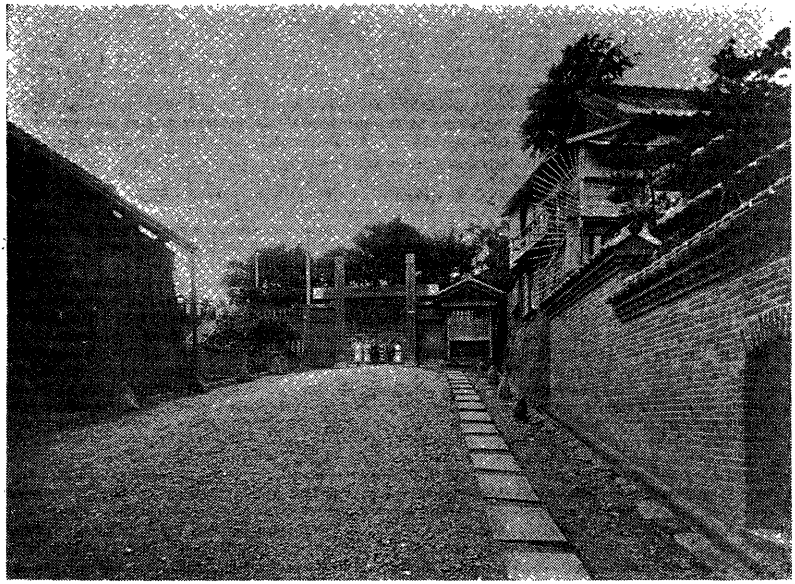
一

明治三一年五月、学生数僅か一二名を以て出発した政治科（大正九年以降政治学科）は、昭和四三年四月現在、教授以下助手に至る専任三一名という、純政治学科としては恐らく全国最大のスタッフを擁し、学生数に至つては、三千名を越える大規模の政治学科に発展するまでになつている。この間政治学科の成長過程には、幾多の変遷があり、変貌を遂げているが、注目すべきことは、この政治科が塾の歴史の中に占める地位ないし役割である。

政治科が理財科の母屋を借りて誕生したのは、明治時代の塾全体の組織から当然であり、それは、政治科の時間割が「理財科の時間表を見よ」という掲示で片づけられていたことでも知られる。しかし、理財科から分れて新しく政治科が開設されたことは、それだけに意味があつたのである。それは、従来からあつた理財科が実業界向きであつたのに、政治に志す意欲的な学生や学問に専念しようという学究向きの学生は、政治科に新しい期待を寄せたのである。それ故にこそ、板倉卓造、高橋誠一郎、小泉信三という後に超一流学者となつた俊英が政治科に入り、そこから巣立つて行つたのである。事実政治科は、明治三一年以来、文学、理財、法律の各科と並んで独立学科として歩んで来たが、大正九年法律学科と合併して法学部の一学科となるまでに、政治科独特の優秀な陣容を備えていたのである。政治科主任、後には政治科学長には、我が国外交史学の泰斗たりし林毅陸博士が座り、その下に、政治史、政治学の田中萃一郎博士をはじめ、東京高商より転じて来た経済学の福田徳三博士、また東京帝大の出張講義であるとはいえ、国際公法の有賀長雄、憲法、行政法の清水澄、美濃部達吉、野村淳治の諸博士が講義を担当していた。これら一流教授がそれぞれよき後継者を塾に残したのは周知の通りである。

二

この草創時代を経て、愈々、政治科生え抜きの花形教授たる板倉卓造博士の登場を見るに至つて、漸く大正時代、政治科らしい政治科になつて行くのである。とりわけ板倉博士の大きな影響によつ



政治科開設当時の正門

て、政治科は、英国流の自由な教養に重きをおく学科、いわばリベラル・アーツの風格がつくられるに至つたといえよう。政治学科をして特色あらしめているのは、林毅陸、板倉卓造、及川恒忠、槇智雄などの明治、大正以来の先輩教授が営々として築きあげられた基礎の上に、自由主義的な寛容なスタイルが形成されたことである。政治学科が、由来、人間性豊かな伸びやかさを特色とする人物を多く出すに至つたのは、それによるといつて差支えない。なお、学事のみならず、塾政一般について、政治学科の関係者が貢献してきたことも見落せないところである。例えば、戦前、戦後にかけて歴代の塾の要職記録を見れば、林毅陸、小泉信三、高橋誠一郎（塾長代理）、潮田江次などの諸塾長、板倉卓造評議員会議長、堀内輝美、槇智雄、石川忠雄（現職）などの常任理事があるのであるが、これら塾政の枢機に参劃した人々が政治科に因縁深いのを見出すであろう。

以上は、七十年全体を顧みての政治科の全般的特徴を回顧したのであるが、以下制度的にその発展を辿ることにする。今日の法学部政治学科の前身である慶應義塾大学部政治科の誕生は、明治三一年（一八九八年）のことであつた。この年五月慶應義塾全体の学事に大改革が行われることになり、高等科および大学部を併合して大学科（五年制）と改め、従来あつた法律、文学、理財のほかに政治科が新設されることになつた。政治科開設の目的は「有為の政治家を養成

する」（『慶應義塾学報』第一号・明治三一年三月）ことであつた。

学科課程は第一、二学年は他科とさして区別なく、第三学年以上において専門の科目を履修させることになつていたから、二学年あるいは三学年に編入することも可能であり、したがつて初年度には第一学年に七名、第二学年一名、第三学年に四名の学生が入学した。すなわち政治科はわずか一二名の学生によつて出立したのである。当時の講師の顔ぶれを見れば、有賀長雄、平沼騏一郎といつた官学系の外来講師が多く、慶應義塾出身者による専門課程の教員が生れるまでに至つていなかつた。

政治科は開設されたものの、当時「学」として体系づけられた「政治学」は確立されて居らず、したがつて大学部政治科の創立に際して「政治学」が科目として登録されていなかつたのは無理もなかつた。政治科の政治学の講義は、明治三九年四月から開講されたのであるが、それは木場貞長、蔵原惟郭によつて受け持たれ、かの板倉博士も木場政治学を受講した一人である。明治四一年度からは文学科の卒業生で四〇年暮に留学から帰国した歴史学者田中萃一郎博士が担任した。

明治三六年政治科を卒業した板倉博士が欧米に留学の後、明治四三年四月から政治学、国際法、フランス語を講義することになつて、はじめて政治科はその卒業生の中から専任の教員を生むことになつたのである。その政治学の授業は、英米原書をテキストにしながら、興趣満々たる講述によつて学生を魅了した。その後塾出身の政治科スタッフが充実するにつれ、漸次専門科目担当の外来講師は姿を消して行くが、その後昭和に入つても、芦田均博士の如く、こよなく塾を愛して十数年にわたり政治学特殊研究を担当し、政治科の陣容に精彩を加えた非常勤講師があつたことも忘れることは出来ないであろう。

大正時代の政治学科にとつて劃期的なことは、大正九年四月から法律科と合併して法学部のなかの一学科として新たに出発したことであろう。明治三一年以来独立学科として歩んで来た政治科が編成変えされたのは、新大学令に準拠して、経済学部、法学部、文学部、医学部よりなる大学の認可を得るためであつた。かくして法学部政治学科として今日のような体制となつたのである。この大正年代において、特記すべきは法学部機関雑誌「法学研究」の発刊（大正一一年二月）であろう。勿論「法学研究」は法律科と共通の機関誌であつたが、第一巻第一号には田中萃一郎「民主政治論」、占部百太郎「英国議会と種族会」、及川恒忠「支那国務総理論」、板倉卓造「対敵通商禁止に関する英米主義の理論と其変遷」の四編の論文が、法律関係の二論文とともに掲載され、それ以後今日に至るまで、法、政共通の研究発表の場となつている。

爾来政治学科は、林塾長の下に板倉イズムともいうべき特色をもつて発展して来たが、それは昭和一〇年代に入つて漸く際立つて来る。例えばそれは、昭和一三年政治学概論を大学予科の必修科目として設置したことにも見られよう。当時の旧制高校においては、社会科学系としては法学通論しか教えられていなかつたのに、全国にさきがけて塾の予科で政治学概論が設けられたのは、板倉先生を中心とする政治学科教授陣の強い裏付けがあつたからであつた。その実現をみたのは、滔々たる軍国主義時代の波にも拘らず、デモクラシーの旗印鮮明な当時の板倉法学部長の信念が与つて力あつたといえよう。しかし戦争の重圧は塾全体を蔽い、戦時色にぬりつぶされた昭和一九年三月、政治学科の代表的シムボルたりし板倉博士は教壇を去られる事態となり、政治学科に多難な空白時代が訪れたのである。

三

昭和二〇年太平洋戦争の終戦と共に、大学は軍隊から復員する学生を迎え、戦後の政治学科には再びまた伝統的な自由主義的アカデミズムが甦つたのである。多数の復員学生たちが入つて来て、政治学科には新しい活気がみなぎつた。それと共に、戦後特筆すべきことは、旧制大学が占領体制下に解体されて、昭和二四年には新制大学として再発足したことである。このような変化を辿つて、昭和三三年一一月義塾創立百年を迎えた時には、政治学科は二千名を越える学生と戦前に倍する教員を有するまでに発展して来たのである。なお昭和二六年四月からは新制大学院修士課程が開設され、この大学院法学研究科には昭和二八年博士課程が設置された。この政治学専攻課程は、はじめ法律学関係と交錯して、政治学専攻の教授のみならず国際法の前原光雄教授をながく政治学専攻課程の要員として包容していたが、公法学専攻課程の開設と共に、政治学専攻課程として独立し、現在専任教授一〇名を以て構成されている。政治学専攻の学生数は昭和四三年四月現在博士課程一四名、修士課程五七名である。

この間現在までの政治科の歴史において看過できないのは、塾の政治科を今日あらしめるためにはかり知れない貢献をした先輩教授が相次いで去られたことであろう。それは明治・大正・昭和にわたつて政治学科の中心教授であつた林、板倉両先生の逝去である。まず、慶應義塾第六代塾長として、関東大震災後の復興事業、予科の日吉移転の大業をなし遂げられた林毅陸博士が、昭和二五年一二月一七日東京で七十九歳で没された。博士は明治三八年政治科教授となつて以来、昭和二二年講壇を去られるまで殆んど半世紀、西洋外交史の講義を担当し、一時に政界に志を寄せ明治末年以来衆議院議

員に三回当選され、また外務省勅任参事官としてワシントン会議に列されたが、後塾長在職十年、退任後は帝国学士院会員、枢密顧問官として学界、政界に重きをなした。先生は我が国外交史学の開拓者で、斯学不朽の名著と称せられる欧州近世外交史三巻、欧州最近外交史一巻の大著がある。先生の後継者として東洋外交史に英修道、西洋外交史に内山正熊の二教授がある。

板倉卓造博士は、明治四三年大学政治科教員となつて以来、政治科の育ての親であり、大黒柱であつた。大正九年大学政治科学長に就任してから法学部長、体育会長、評議員会議長を務め、塾政治科のため尽瘁されたのであるが、昭和三八年一二月二三日八十四歳で長逝された。板倉先生については、すでに潮田教授が余すところなく述べられているのでここに割愛するけれども、戦後教壇を去つて、時事新報社長に就任以後も、その隠然たる存在は政治科の誇りであり、大きな支えであつた。昭和二六年第一回新聞文化賞を受け、我が国学界、言論界の重鎮であつた。政治学、国際法の権威として、「国民政治読本」、「近世国際法史論」、「国際紛争史考」、「国民政治時代」、「政治家史論」の著作がある。板倉先生の政治科に残した大きな寄与は、その広い学殖の種を多方面に残し、政治学科今日の中心教授を多数育成されたことである。政治学、政治哲学の潮田江次、国際法の前原光雄、社会学の米山桂三、政治学、日本政治史の中村菊男の諸教授はその後継者であつて、博士の影響は広く深く未だ政治学科に滲透している。

及川恒忠教授は、大正九年欧州留学帰国の後法学部教授となつて以来、昭和三四年一月一〇日病没まで、実に五十年間にわたつて終始政治学科の教授として、支那法制史、中国政治史など諸講義を担当された。我が国における中国憲法研究に先鞭をつけ、「支那政治組織の研究」という大著があるが、今日塾政治学科の中国政治史研究陣の充実は教授積年の尽力の成果というべく、石川忠雄現理事はその後継者である。また大正一五年以来法学部教授として憲法を担当した山崎又次郎博士は、異色ある国体明徴を説く憲法学を講義したが、昭和一二年退職し、日本大学、東洋大学で教鞭をとり、昭和三七年七月三〇日病没した。憲法学要論などの著書がある。

ここに見落せないのは、板倉門下の、潮田、島田、米山の諸教授の如く法学部長の要職につき、塾の行政に参与した人材は少くないが、終戦当時理事であつた槇智雄教授の存在である。終戦後塾を去つて防衛大学長となられたことは周知のところながら、教授は大正以来英国憲法史、政治制度史をながく講じた。この槇教授の下に残つたのが現在政治制度史担当の伊藤政寛教授である。伊藤教授は、最近まで学習指導主任として政治学科の制度的整備発展に尽力し、戦後の過渡期に科目学則の整頓、学生管理に当つて、時に応じて措

置を誤たず、政治学科の安泰につくした蔭の功労者であることを忘るべきでない。同じく大正末期から英国憲法史を講じた占部百太郎博士は、二〇年三月五日逝去した。その後継者が現在英米憲法史専攻の藤原守胤教授である。

島田久吉教授は、大正一三年四月法学部助手となり、六年にわたる欧州留学の後昭和五年帰国して助教授、七年四月法学部教授となつた。昭和二六年以来法学部長を二期つとめ、故板倉博士の愛弟子として潮田教授と共に古参教授の双璧であつたが、昭和三六年一一月二日五十九歳で逝去した。その間法学部の発展に寄与されたこと少なからず、多数の後輩を育成され、その直弟子たる、石井良博（政治学史）、大山正武（憲法）、多田真鋤（近世政治思想）の諸教授、中沢精次郎（現代ソヴィエト論）、奈良和重（現代政治理論）の助教授は、それぞれ多彩な学究活動を展開している。島田教授の該博深遠な学識は、その余りにも博学多識のために著作の形で残らなかつたのを、この弟子達の献身的努力によつて、昭和四二年一一月「政治思想と政治制度」という立派な遺作論文集に完成されたのは、政治学科いな学界の美挙として記憶さるべきことである。

四

これら政治学科の創設と発展に尽された元老教授が去つて行かれて後の政治学科の近況は、その陣容の量的拡充とともに、質的にも新しい進歩を示しつつあるのである。昭和四三年四月現在、専門科目の教授一三名、助教授一二名、専任講師二名、助手四名を数え、一般教養課目（法律学科共通）の専任教授一九名、助教授一六名、講師一七名を加えれば、総数八六名に及ぶ大規模な陣容に膨脹したのを見出すであろう。ここに目立つのは、新設講座の増大と新進助教授、講師、助手の激増であつて各専門担当教授がそれぞれ若手要員をかかえて、政治学科の研究者層を厚くしていることである。例えば、米山教授は、マス・コミュニケーション論の生田正輝、文化人類学の十時厳周の新進教授をはじめ、川合隆男講師を、潮田教授は鷲見誠一講師、根岸毅助手を、英教授は東南アジア論の松本三郎、東洋外交史の池井優の二助教授を、伊藤政寛教授は、現代政治制度の内山秀夫、現代アフリカ論の小田英郎、議会制度論の林烈の助教授を、藤原守胤教授はラテン・アメリカ論の賀川俊彦、アメリカ政治史の太田俊太郎の助教授を、中村菊男教授は日本政治思想史の中村勝範教授、政治心理学の堀江湛助教授を、生田教授は鶴木真助手

を、石川忠雄教授（現在常任理事のため兼担）は山田辰雄助手をもつている。更に専門科目の担当者には、イスラム法、中近東論の遠峯四郎、古代・中世日本政治史の利光三津夫の二助教授があるが、昨年には経済学専攻の田中宏助手も生れて、かつて政治科が大正から昭和にかけて成瀬義春教授、高城仙次郎教授を擁した姿を再現する兆が見えるのも新しい傾向といえよう。

このような政治学科のいわば内的拡充と共に、注目すべきことは、対外的発展、すなわちわが国政治学界に対する寄与である。その創立以来東京大学にあつた日本政治学会の事務局は、一九六三年には私学として初めて塾に移されることになり、潮田教授は理事長に就任したのである。戦後塾は屢々学会を主催したが、特に日本政治学会の大会を二度にわたり開催し、その運営には、藤原、内山、石井の諸教授が理事として、事務局担当には中沢、奈良の助教授などの若手が協力したのであつた。このほか、国際法学会、日本国際政治学会には英、内山両教授が理事として、日本社会学会、新聞学会には米山、生田教授が相次ぎ理事として協力して塾で開催されたことも、法学部政治学科のわが国学界にたいする貢献といえよう。

なお最近では、塾による留学、外国政府招聘による留学をはじめとして、ヨーロッパ、アメリカの各大学との交換教授、留学者もふえ、外務省の委嘱による海外出張もとみに行われている。更にこの数年来、共同研究体制が整えられ、政治学各分野の統合的研究や翻訳の企画が逐次すすめられていることも注目すべきであろう。例えば、一昨年来共同研究を続けて来た地域研究グループは、その成果を「変動期における軍部と軍隊」としてまとめあげ、それは本年三月慶応通信から発刊されるに至つている。このほか各種の共同研究が目下進捗しつつあり、ユニークな学問的業績が政治学科のスタッフによつてあげられていることは、政治学科将来の発展に光明を投ずるに足るであろう。

（奈良・池井記）